

館の設置目的・理念を十分に反映した展示事業の運営 ～複数の事業を有機的に連携させた取組を通して～

大淀川学習館
副館長 小玉 宏

研究成果の概要：

- 期間展示（作品展）の企画・立案、運営の手法について一定の指針作りができた。
- 館の設置目的・理念を事業の中心に貫き、来館者へ向けて明確なメッセージを発信することで、指定管理業務をより高い水準で達成することができた。

1. 研究の背景

本館は市制 70 周年記念事業として、大淀川の自然や水資源を大切にすること意識の高揚や、郷土愛を育むことを目指し、特に次世代を担う子どもたちが自然を実際に見て、触れて、体験し、主体的に学習するための施設として平成 7 年 3 月に開館した。平成 14 年度に増築・新装開館を経て、今年度末で 19 年目を迎える。

本館の設置目的は次の通りである。

- (1) 大淀川の自然や水資源を大切に
するという住民意識の高揚を図る。
- (2) 郷土を知り、郷土を愛する心を
育てる。
- (3) 子どもから大人までの多くの住
民が大淀川や環境問題について学
習できる。

本館における展示事業は、

- (1) 常設展示
- (2) 期間展示（企画展・作品展など）
- (3) 3D ハイビジョン川のシアター
- (4) 展示解説

に区分されている。

開館当初からのすべての事業計画について見直してみたところ、時代や世相の変遷に合わせて事業の展開に工夫・改善が見られ、来館者のニーズに即した形で運営を行っていることが分かった。

その一方で、設立当初の理念を色濃く反映した各々の事業が何の目的で行われているのか、館の設置目的・理念や管理運営方針のどの部分に対応して実施されているのが希薄になっている面も見受けられた。

また、現在実施している事業は、それぞれが独立した形で運営されており、相互に連携させた取組についてはほとんど行われていないのが現状である。

事業の内容によっては、有機的に連携させることでより魅力が高まるとともに、館の設置目的・理念についての発信力がより強化できるのではないかと考えられるものが見受けられる。

指定管理業務をより高い水準で達成するために、館の設置目的・理念について、幅広い年齢層の来館者に分かりやすく発信していくための工夫が必要であり、今回の研究では、展示事業を中心に他事業と有機的

に連携させることで、より魅力を高め、来館者に館の設置目的・理念をより強く訴えることのできる工夫・改善ができないか探ることとした。

2. 研究目的

館の設置目的・理念を十分に反映しつつ、来館者にとって魅力ある展示事業の在り方について探る。

3. 研究の方法

- (1) 展示事業に結び付けることのできる教室事業やイベント事業の洗い出し
- (2) メッセージ性を持たせる工夫
- (3) 連携や新企画による工夫・改善
- (4) 総括・次年度へ向けて

4. 研究成果

(1) 展示事業に結び付けることのできる教室事業やイベント事業の洗い出し

本館の事業計画をもとに、展示事業に結び付けて連携することが可能な教室事業やイベント事業を洗い出し、検討用関連表を作成した。(図1)

その結果、実施している教室事業やイベント事業について、展示事業と連携して実施可能なものや、連携した方が効果が高いと思われるものを絞り込むことができた。

また、検討用関連表を作成する過程で、作品展示に関連する教室やイベントを企画し実施することで、大きな相乗効果が得られると思われるものも見出すことができた。

(2) メッセージ性を持たせる工夫

そこで今回は、展示事業の中でも期間展示における作品展（以下、作品展）に焦点を絞り込み、他事業との連携により工夫・改善が

見込めるか研究を進めることとし、共通のテーマで分かりやすくメッセージを発信できないか考えた。

展示事業		イベント	
常設展示	テーマ展示・主体展示・コーナー展示		
特別企画展	水の生き物と仲良くなろう！ザリガニ展	ザリガニ釣りに挑戦	川の生き物で水質調べ
	水の生き物と仲良くなろう！カブタ展	カブタシ・タワガタムシのクイズ大会	カブタシ・タワガタムシの飼育教室
	水の生き物と仲良くなろう！ドクターフィッシュ体験	カブタシ・タワガタムシのすもう大会	
		魚つかみに挑戦！	メダカの飼育観察
		小魚すくい	アユ・ウナギの稚魚放流体験
		金魚すくりに挑戦	
	カラー魚拓への挑戦		カラー魚拓に挑戦しよう
	しあわせもんのメカ展		
	宮崎県産材の積み木で遊ぼう		
	春一番！ひな山	金魚すくりに挑戦	
企画展	大淀川流域の文化・伝統パネル展	ぜんざいもろまい	バスで巡る大淀川流域と宮崎の名所・地蔵
	大淀川流域の写真展		
	大淀川流域の動植物画コンクール入賞作品展		
	小・中学校川の学習展	大淀川ウォークラリー	大淀川の水を調べよう
		大淀川学習館検定	ホテル環境検査
			水産環境見学で自由研究
			川の生き物で水質調べ
			バスで巡る大淀川流域と宮崎の名所・地蔵
	その他	ウナギの一生展	大淀川釣り教室
		通常上映・特別上映	かヌーにチャレンジ
		5品講座	アユ・ウナギの稚魚放流体験
川のシアター			
展示解説			

(図1) 展示事業と教室事業・イベント事業との検討用関連表

作品展は、テーマに沿った作品を募集し展示することを通して、大淀川の動植物、文化、環境についての興味・関心を高めることをねらいとしており、現在は下記の通り定期的に開催している。

- 大淀川流域の写真展
- 大淀川流域の動植物画コンクール入賞作品展
- 小・中学校川の学習展

これらの作品展はいずれも「大淀川とその流域に住む生き物や周りの自然を大切にしようとする心を育てる」ことを大きなねらいとしており、このことを参加者や来館者に分かりやすく伝えるために、作品展のキャッチコピーを「川や生き物を大切にしよう！」とす

ることとした。

(3)連携や新企画による工夫・改善

ア 大淀川流域の写真展（図2）

大淀川流域の動植物・風景等の写真を募集・展示することにより、流域の動植物や自然への関心を高め、自然を大切にしようとする心を育てることをねらいとしている。



（図2）大淀川流域の写真展のようす

今年度で13回目の開催であり、過去5年間の応募数・来館者数は以下の通りである。

（表1）

年度	応募数(内一般)	来館者数
H21	262(0)点	記録なし
H22	286(0)点	8,203名
H23	390(1)点	7,256名
H24	346(0)点	8,090名
H25	272(1)点	13,085名

（表1）大淀川流域の写真展における

応募数・来館者数(直近5年間)

現在の応募方法は、流域の小・中学校からの団体申込みと一般申込みの2種類であり、共に2L判にプリントしたものを直接持参するか郵送にて申込むことになっている。

応募数のデータから、団体からの応募がほとんどを占めており、一般からの応募がたいへん少ないことが分かる。

また、この応募方法では、団体申込時に担当の教職員の負担が大きいこと、返却の手続きが煩雑であること、郵送による返却希望の場合には郵送料がかかること、などの課題が挙げられていた。

<工夫・改善①>

応募方法の簡便化

そこで、従来の応募方法に加えて、インターネットによる応募について検討することとした。

インターネットのサイトには無料で応募フォームを作成できるものがあり、費用を掛けることなく見栄えの良い応募フォームを簡単に作成することができる。

今回はその中の一つである adobe 社の ADOBE FORMSCENTRAL というサービスを利用しフォームを作成した。（図3）

（図3）大淀川流域の写真展における

インターネット経由の応募フォーム

https://www.adobe.com/formscentral/ja_JP/home.html

この応募フォームは、PCだけでなくスマートフォン等のモバイル機器からも応募が可能であり、大きな利点となる。現在、スマートフォンの普及が著しく進んでおり、搭載されているカメラ機能も高性能である。スマートフォンで撮影した画像データをそのまま簡単に送信できる仕組みを作ることで、応募者の心理的負担が少なくなり、特に一般の応募者数の増加が期待できる。

応募者数が増えるということは、館のメッセージがそれだけ多くの市民に伝わるということであり、その意義は大きい。

また、画像データで応募してもらうことで、本館の facebook ページに掲載したり、スライドショー形式にして館内のディスプレイで表示させたりすることが容易にできるようになる。広告・告知の効果をより高める点においても大きな利点があると考ええる。

<工夫・改善②>

撮影技術についての学習

写真展の応募期間の前に、風景写真や昆虫写真などの撮影に関する学習の機会を設定することにより、参加意識を高めると共に、館のメッセージをより多くの人へと伝えることができると考え、連携可能な教室・イベント・展示について企画した。

①体験教室・イベントとしての企画「自然や生き物をカメラで撮ろう」

体験教室やイベントとして、初心者向けのカメラ教室を開催する。本館職員もしくは外部講師が担当する。

②展示としての企画「みるみるカメラが上手くなる！」（図4）

初心者向けの写真撮影テクニックについ

て書かれた本を集め参考図書コーナーを設置する。また、撮影の要点を分かりやすく解説したパネルを作成し展示する。



（図4）参考図書コーナー

「みるみるカメラが上手くなる！」

③写真展からの派生による企画「大淀川流域のカラーチャート展」

カラーチャートとは、花などの写真を色ごとに分けし規則性を持たせて展示する手法である。（図5）



（図5）カラーチャート展のようす

インターネットを活用した応募方法であれば、このように写真展から派生する新規企画についても設定することが容易になり、時機に応じてより柔軟に運営することが可能となる。

イ 小・中学校川の学習展（図6）

小・中学校で行われている総合的な学習の

時間でまとめた、河川に関する実態などの学習成果を展示し、広く流域住民に知らせることを通して、大淀川流域の環境に対する関心を高め、大淀川の自然や水資源を大切にしようとする心を育てることをねらいとしている。



(図 6)小・中学校川の学習展のようす

今年度で 9 回目の開催であり、過去 5 年間の応募数・来館者数は以下の通りである。(表 2)

年度	応募数	来館者数
H21	36 点	記録なし
H22	41 点	10,301 名
H23	32 点	11,575 名
H24	2 点	9,636 名
H25	7 点	開催中

(表 2)小・中学校川の学習展における
応募数・来館者数(直近 5 年間)

応募数のデータから、平成 24 年度より応募数が激減していることが分かる。

小・中学校においては、総合的な学習の時間を活用して「大淀川学習」に取り組んでいた。しかし、新学習指導要領への完全移行により総合的な学習の時間が削減されたことに伴い、市内の小・中学校においては「大淀川学習」がほとんど取り扱われなくなってしまうためと考えられる。

＜工夫・改善①＞
募集時期の変更

これまでの川の学習展における募集期間は 12 月～1 月となっていた。これは、大淀川学習に取り組んだ成果を 10 月～11 月の学習発表会や文化祭などで発表していた学校が多かったためである。

しかし、大淀川学習の機会が激減した今となっては、この募集期間では作品が集まらないことが明らかになった。子どもたちは夏休みの自由研究などで環境についてまとめることが多く、その時期に合わせて募集を行うことで作品数を増やすことができると考え、次年度からの募集を夏休み期間に合わせて実施することとした。

＜工夫・改善②＞
既存の教室・イベントとの連携

川の学習展はその性質上、本館の設置目的を直接的に具現化しており、既存の教室やイベントとの連携が図りやすい。

そこで、検討用関連表(図 1)をもとに、連携を図ることのできる教室やイベントで、川の学習展への応募を積極的に呼びかけると共に、学習成果のまとめ方の例(図 7)を配付したり、学習指導員による自由研究相談週間を設けたりすることで子どもたちの学習を支援し、応募数の増加に努めたい。

**大淀川学習館で
ワクワクドキドキ自由研究!**
～自然を科学する👁️を育てよう～

【研究の進め方とレポートのまとめ方について】(例)

1 「研究のテーマ」	☆ どんな研究をするか、テーマを決める。
2 「研究の動機」	☆ その研究をしようと思った理由を書く。
3 「研究の予想」	☆ どんな結果になるのか、予想する。
4 「研究の方法」	① 何をどの順番でするのかを決める。 ② 実験や観察の方法を考える。 ☆ 同じにする条件と変える条件を区別する。 ☆ 数、大きさ、重さはきちんと単位を付ける。 ☆ 同じ実験を数回くり返して、その平均値をとる。 ☆ データは多くとり、必要なものを選び出す。 ③ 研究に必要なもの(道具など)を書き出す。
5 「研究のまとめ」	① 実験や観察の結果を書く。 ② データは見やすいように表やグラフを使う。 ③ 分かりやすく伝えるために図や写真を使う。 ④ 予想と合っていたか、違っていたかを確認し、なぜこのような結果になったのかを考える。 ⑤ 結果から分かったことを書く。
6 「研究の感想」	☆ 研究をとおして感じたことや思ったことを書く。 ☆ 今後の生活に生かしたいことや、さらにくわしく調べてみたいことを書く。
7 「参考資料」	☆ 参考にした本の名前と作者、出版社を書く。
8 「研究メンバー」	☆ 研究をしたメンバーの名前と学校名を書く。

(図 7) 自由研究用の配付プリント

「自由研究の進め方・まとめ方」

(4) 総括・次年度へ向けて

今年度の研究や試行で見えてきた課題を解決していくことが、本館からのメッセージをより広く周知させることにつながると考える。

展示事業を始め全ての事業に渡って本館の理念や目的を達成することができるよう、さらなる工夫・改善を図りたい。

5. 参考図書、論文等

○湯澤明著『イベント戦略入門 企画・展開・実施』産業能率大学出版部 1992